

## ドイツ史劇におけるヘルマン・モチーフの受容（3）

——クリスティアン・ディートリヒ・グラッベ  
『ヘルマンの戦い』（1838年）の考察を中心に——

桑原ヒサ子

### I グラッベの『ヘルマンの戦い』の位置

クライストの『ヘルマンの戦い』（1808年）以後、ヘルマン・モチーフを扱う文学作品は雨後の筍のように誕生している。それらの作品を概観すると、作品成立の動機が容易に見て取れる。1815年後はドイツ統一への期待が潰えたこと、1848年後は三月革命の不首尾に伴いドイツ統一が失敗したことが、そして1871年後は、ようやく達成されたドイツの統一、あるいはトイトブルクの森のヘルマン記念像の建立が作品成立の動機となったことが判る。しかし、クライストから現代文学に至る期間においてヘルマンの運命を描いた戯曲の中でも最も重要な作品としては、クリスティアン・ディートリヒ・グラッベ Christian Dietrich Grabbe (1801-1836年) の『ヘルマンの戦い』（1838年）<sup>(1)</sup> を挙げなければならない。

まずグラッベの『ヘルマンの戦い』の成立時期を確認しておこう。上記の中でもヘルマン文学が頻りに書かれるのは解放戦争後の1815年から1830年までである。したがって、おおよそこの期間の直後に当たる。一方、Fr.ゼングレは1760年から1860年の期間を「ドイツ史劇の時代」としたが<sup>(2)</sup>、グラッベの作品はこの時代の終焉期に位置することになる。

この作品に対する同時代の評価は、この作品が舞台化しにくい形式を持っていたことも原因して、現実のあらゆる根元的な力が根ざす「ドイツ国民英雄叙事詩」というものであった<sup>(3)</sup>。激動する当時の社会情勢の中では今日的な意味が見出されなかったのである。劇作家としてのグラッベはその後、自然主義文学や印象主義文学によって再発見されるが、『ヘルマンの戦い』の初演は国家社会主義の時代を待たなければならない。

作品成立からほぼ100年を経た1934年6月10日にヴェストファーレンのネットルシュテットの野外劇場で、H. バックマイスターによって民族的ファシズム色濃厚な総統賛美劇に改作されたグラッベの『ヘルマンの戦い』は、W. コルテ演出によって初演を迎える。クライスト同様ナチズムの文化政策に組み入れられたこの作品について、以後数々の上演記録が残っている<sup>(4)</sup>。

クライストとの相違は、クライストの『ヘルマンの戦い』がヘルマン・モチーフを政治的にアクチュアルに描いているためヴィルヘルム時代やワイマール期にすでに闘争劇として演目に組み込まれていた一方で、グラッペは第三帝国時代にようやく古典作家の地位を得たことにある。

ヘルマン神話とナチズムとの関係に一定の冷却期間が置かれ、再びグラッペ研究への関心が生まれるのは70年代に入ってからのものである<sup>(5)</sup>。先のゼングレは、グラッペの『ヘルマンの戦い』を当時盛んだったヴェストファーレンの郷土文学に分類している<sup>(6)</sup>。たしかに、私信<sup>(7)</sup>の中でグラッペは、故郷のデトモルトに近いトイトブルクの森が歴史的出来事の舞台であったことが創作の切っ掛けであること、アンヴィバレントな感情を抱いていた故郷ではあったが、リッペ地方の豊かな自然や人々のメンタリティを賛美したいという意図を記している。作中、ゲルマン人がヴェストファーレンの農民として登場し、場面が故郷の田舎を思わせる環境に移し替えられている点を、ゼングレ始めこの作品の郷土的特徴を強調する二三の研究は郷土文学への分類の根拠としている。しかし、作品の中に描かれたヘルマンの戦いという世界史上の出来事を分析しようとする立場とヴェストファーレンのリッペ地方の郷土賛美の作だとする立場は、全く相容れないものである。郷土文学と見なす立場からグラッペの『ヘルマンの戦い』を史劇からの逸脱と見るのでは、ドイツの置かれた歴史的・社会的状況の変化がグラッペの歴史観に影響を及ぼし、そのためにクライストとはまったく異なるヘルマンを描き出すことになったこと、同時にグラッペ自身のそれまでの史劇の登場人物とは異なる主人公を創出したのだという、ここで立てようとする仮説は排除されてしまうだろう。

80年代の研究の多くが取り上げたのは、最終場面の解釈だった。ローマ軍に対する圧倒的勝利で終わる筋は、グラッペの場合も変わりない。しかしグラッペは、勝利に湧く中、ローマ帝国に対するゲルマニアの平和を確実なものにするためライン河沿いのローマ軍の要塞を占領することをヘルマンに提案させる。ところがこれが民衆やほかの族長たちに拒絶されると、ケルスキ族長は自らの計画を諦め、彼らを勝利の宴へ招待する。この短い追加場面は、ヘルマン文学における「ヘルマンの戦い」の筋立てに慣れた読者や観客をひどく当惑させるものだ。それに相応するように研究においても、歴史の展開を見通した「オプティミズム<sup>(8)</sup>」が表現されているというものから、ヘルマンの態度に「冷笑的ペシミズム<sup>(9)</sup>」や「諦念<sup>(10)</sup>」を読み取るもの、あるいは「諦念」の中にも「和解」を見るもの<sup>(11)</sup>、「悲劇」の解釈を試みる<sup>(12)</sup>ものまで多様である。

この論稿においても、この場面が議論の発端になる。グラッベの同時代人による「ドイツ国民英雄叙事詩」という理解はもちろんのこと、先述した郷土的特徴ゆえに、あるいはクライストの傾向劇的作品と比較して、グラッベのヘルマン劇のアクチュアリティ欠如を指摘する向きもあるが、そうした見方には筆者は与しない。そうではなく、クライスト以降のナポレオンの侵攻と解放戦争以後のドイツの社会的状況、ナポレオンによる近代国家・社会の予感がグラッベをしてもはや伝統的史劇の主人公を描かせることを躊躇させたという立場をここでは取る。まず、作品構造を分析し、当時の時代情況と照らし合わせながら考察を進める。そして、グラッベのこの作品が「ドイツ史劇の時代」の終焉に位置する作品に相応しく、同時に20世紀的ジャンルである「悲喜劇」の特徴を内包する作品であることも確認したい。

## II 二つの対立構造 —ゲルマン人とローマ人、ヘルマンとゲルマン人たち— 1. ゲルマン人とローマ人

議論の余地を残す最終場面があるとはいえ、グラッベもクロップシュトックやクライストと同様に、ドイツ的なものを脅かし、異質な価値観を押しつける侵入者から自国を守ろうとするヘルマンの愛国的態度を賛美している。

ゲルマニア＝ドイツという明確な図式を作ったのはクライストだった。1808年に書き上げられた彼の作品は、1805年のロシア・オーストリア軍にナポレオン軍が勝利するアウステルリッツの戦い、1806年プロイセン軍がナポレオン軍に大敗を喫するイエーナとアウエルシュテットの戦い、翌1807年にはプロイセンにとって屈辱的なティルジットの和約が締結された流れの中で成立した。クライストの作品は、プロイセンを中心に分立する領邦国家が一丸となってナポレオンに戦いを挑み、外国の支配からの解放を緊急に訴える意図を持っていたから、ゲルマニアがドイツであり、ローマがナポレオンのフランスを意味することは誰の目にも明らかだった。さらにクライストがその対立に、絶対的自然と退廃的社会を主題化していたことはかつて詳細に分析した通りである<sup>(13)</sup>。

ナポレオン戦争終結後、ドイツの課題は「外国からの解放」から「ドイツの統一」へ重心を移すが、その課題に対する期待と失望の時期にグラッベは、クライストと同じ図式を当てはめている。「ドイツの解放者」と見なされるヘルマン、「我々ドイツ人」、「ドイツよ」という愛国的呼びかけが散見され、ゲルマニア(人)＝ドイツ(人)が自ずから表象される工夫がされている。もっとも、「ドイツ(人)」の言葉を使用するのはヘルマンとその妻トゥスネルダに限られているのだが。ローマ軍はナポレオン軍に対応するが、もちろ

んグラッベの現在から見れば回顧的である。

戯曲の提示部に当たる「導入部 Eingang (全7場)」で、ゲルマン人の生活は、文明化以前の理想状態として紹介され、自然人の本源的で墮落を知らぬ素朴さが強調されている。ゲルマン人の敵として、文明化されたがゆえに自然とは無縁のローマ人が対照的に配置されている。ゲルマニア総督ワルスはヘルマンのケルスキ族を同盟軍として、ローマに抵抗する他のゲルマン部族を平定しようとするのだが、出陣を間近に控えて彼はヘルマンに語りかける(第5場)。「善をなそうとする君の情熱は絶賛に値するぞ。これによって君はこの国々にどんなにか人道と文明開化を促すことか<sup>(14)</sup>。」しかしヘルマンは「人道だと?ローマ人の征服者というのは暴政に代わる素晴らしい言葉を持っているものだ。文明だと?」(336頁)と独白する。そして軍の先頭を切って進軍するローマ人たちを見渡しながらか「よそ者の見事な武器が我々の尊い大地を汚していくことよ! (周囲を見渡し) ドイツよ、汝の野と山と谷、そして民衆ともども私を見放し給うな。私は汝のためだけに戦うのだから。」(336/7頁)

この対立は、文明化された社会を個人主義を形成する空間と理解する一方で、自然人間性の頽廃の現象として拒否するルソーの理解から発し、クライストを経由してグラッベに及んでいる。ゲルマン人と自然との同一性、自然との調和的一体感は、戦闘場面では、ローマ軍に襲いかかるゲルマン人の荒々しさが、ローマ軍を苦しめる天候の激変となって現れることにも見て取ることができる<sup>(15)</sup>。

文明社会の精神を代表するローマ人は一貫して抑圧者として説明される。ゲルマン人の作物や家畜を搾取し、未開の民を動物同然と蔑み、彼らを自分たちの価値観で裁いてゆくローマ人。文明社会はグラッベの作品において、「法」によって象徴されている。「法」は秩序をもたらすものとしてではなく、人間性を抹殺するものとして描かれるのである。

戯曲はローマ人の歩兵が中隊長に不平を言った廉で処罰される場面で始まる。厳しい雪中行軍による疲労と飢えのため、言い換えれば自然の欲求が原因ではあったが、中隊長に反抗的な口を利いた兵士は、軍律に従って感情のかけらも見せぬ同僚に撲殺される。この短いエピソードは被抑圧者ゲルマン人と抑圧者ローマ人の関係を予告する。そして第3場はローマ人がゲルマン人を裁く裁判の場面である。私生児を四人産まれた女による男への扶養訴訟、賭博による負債の返済を要求する訴訟、妻の姦通の訴訟が続く。法務官も書記官もゲルマン人を馬鹿にしているので、全うな裁判をする気はない。愚直なゲルマン人たちにとって法務官の判決は正義からかけ離れた不条理な

ものだ。扶養訴訟で訴えられた男が国家から金を支払われ、最終的には原告の女が鞭打ちの刑に処せられる。賭博の負債はなかったことにされ、姦通された夫は公衆の面前で恥の上塗りをされる。そこへ登場するヘルマンは民衆から裁判官であってほしいと懇願される。裁判の場面に登場する法務官は、法を熟知していると同時に、機械的に事を執行するローマの官僚主義を体現している。しかし、ゲルマン人には理解できないラテン語を話し、分かりにくい法概念をひけらかす書記官の方に、グラッベは自然からかけ離れたローマの現実を代表させ、法務官よりさらに非人間的な印象を与えている。グラッベはこの書記官の存在感を強調するために、戦闘場面にも二度登場させている。「第二日目」の激戦の中、ウォルスに売買契約書にサインを求めにやってくる。軍事命令を出し続ける総督の脇で、書記官は延々と書類を読み上げている。その内容は、ウォルスからケルスス人の土地を贈与されたローマ人がその土地を別のローマ人に売却するが、この苦しい戦況を知り、土地を購入したローマ人は自分の土地がゲルマン人のものになることを恐れ、ローマでその土地の償還請求ができるよう、書類を整えようと急いでいるのであった。書記官は、ウォルスの命令で戦場から連れ出される。「第二夜」で一時休戦の折りに、書記官は再度ウォルスにサインを求めにやって来る。エッギウスの死で、話し相手を失ったウォルスは、軍隊の中では比較的教養ある人間と見込んで書記官を話し相手にしようとする。しかし、不安に満ちたウォルスの問いかけに、彼は全くの無関心で反応するのみである。人間性を持ち合わせず、法の単なる代理人であるこの書記官は、ゲルマン人の勝利後、鞭打ちの刑を受けた女を含む民衆たちに舌を抜かれ報復される。こうして、他国の法による抑圧からの解放は、軍事的勝利の際に象徴的に表現されるのである。

この「法」へのこだわりは、もちろんナポレオン法典を背景にしている。ナポレオン戦争は当時の国際環境の中で二つの意味を持っていた。大陸諸国では領主貴族層の封建的支配が行われ、ナポレオン軍は国民にとってナポレオン法典の施行をもたらす解放軍であった。しかし、その反面、ナポレオン帝国の独裁的支配や搾取は民族的自覚を呼び覚ましたので、民族運動の弾圧者でもあった。グラッベはもちろんこの事情を作品の中に描き入れているのである。

戦闘に対する態度もゲルマン人とローマ人とでは全く異なる。ローマ軍が訓練され戦歴を重ねた組織立った軍隊であるのに対して、ゲルマン軍は寄せ集めである。ローマの兵士がウォルスにゲルマン軍の様子を次のように報告する。

全くのごたまぜです。ある者は鹿の角か大雷鳥の羽か何かを頭に載せているかと思えば、別な者は頭髪を結び上げているし、こめかみにたてがみのようなものが柔らかくなびいているかと思えば、利発な面がほとんど見えないくらいに錆び付いたやかんを目深に被っている者もいます。大山猫や熊、大鹿の毛皮の腰巻きを軍服にしている者もいますし、全員まちまちのごたまぜで、ほかに何があるかほとんど分からないほどです。(335頁)

そして、士気の高揚に関しても両者は対照的である。量的には作品全体の三分の一を占める「導入部」に戦闘場面が続く。戦いが三日続いた歴史的事実に即して「第一日目」、「第一夜」、「第二日目」、「第二夜」、「第三日目」、「第三夜」の構成である。第一日目の戦闘の際に双方から兵士たちを鼓舞する声が錯綜する。ローマ軍の第十九師団長エッグウスは「ローマ帝国」や「皇帝」の名において兵士を鼓舞する。つまり愛国心という抽象的精神性が共有されているのである。このことは、ウォルスによるローマ軍査閲の際に、兵士たちがローマ帝国の建設に関わる戦闘で活躍したことを誇らしげに語る場面（導入部第5場）と合わせて強調されている。一方、ヘルマンも「ドイツ」の名においてゲルマン人たちを鼓舞しようとするが、「ドイツ」の意味は理解されない。彼らはドイツ人なのではなく、マルゼン人、ケルスキ人、ブルクテール人、テルクテール人だと各々が主張するので、ヘルマンは仕方なく手っ取り早い方法として、ローマ人から略奪されたレンズ豆やキャベツ、山羊、羊、鶏などを思い出させ、士気を高揚させるのに成功する。この非常に現実的で具体的な物の列挙は、ローマ軍の愛国心に比して滑稽であり、グロテスクな印象すら与える。

この対比にもナポレオン戦争の反映が見て取れる。戦争史の中で、ナポレオン戦争は初めて近代的戦争の様相を呈した。中部および東ヨーロッパの諸国家では、戦争はなお国民的利益と直接の関係を持たず、多少強硬な外交に過ぎなかった。しかしフランスでは革命以来、戦争は市民と自覚する解放された国民大衆の仕事であった。いわば諸侯の傭兵が愛国心を持つ近代的軍隊と対抗したことになる。ナポレオンはフランス革命が作り上げた徴兵制による大軍隊と武器をそのまま引き継いでいた。こうした戦争史におけるナポレオン戦争の意味をグラッベも当時すでに理解していたに違いない。

ゲルマン人の自然とローマ人の文明社会という対立では、グラッベは明らかに自然状態を賛美し、文明社会のネガティブな面を強調した。しかし、第

二の点においては、ローマ人を批判し、ゲルマン人を賞賛しているとは言い難い。ヘルマン自身が、侵略者からゲルマニアを解放し、さらにゲルマン諸部族をドイツの名の下に統一するという愛国的情熱に燃えていることは明らかであるからだ(導入部第3場331頁、332頁、第5場336頁、第一日目353頁、第二日目361頁、第二夜第2場367頁)。同時に、闇雲な攻撃を避け、組織的戦略の必要性を訴えてもいる(導入部第7場(最終場)340頁、第一日目350/351頁)。

## 2. ヘルマンとゲルマン人たち

### (1) ヘルマンと族長たち

侵略者からの解放という点では、ゲルマン人も部族長たちもヘルマンと行動を伴にする。ところが愛国心やヘルマンをリーダーとしたドイツ統一がテーマとなると、なぜヘルマンは無視されたり、抵抗されたりするのだろうか。叔父のインゴマルはヘルマンの指示を無視して味方の親衛隊を戦死させるが、それを非難されると侮辱されたとしてヘルマンに復讐を誓う(第一日目350/351頁)。このインゴマルの決闘の誓いはその後二度までも(第三日目第1場368頁、第三夜374頁)再確認されるという念の入れようである。第二夜第2場の「ヘルマンのテント」に集まった部族長たちとヘルマンの会話からも、ヘルマンがいかに指導的地位を得ることが困難かがうかがえる。

ヘルマン：ここにはドイツの気高く偉大なる人々がほぼ全員集まった。我々が一丸となるためには、常にまずは現在のような窮乏に陥らなくてはならないのだろうか。我々が自然に一つになり、平和なときも共通の首長の下で暮らす方がいいのではないだろうか。

エンゲル族長：そうやって、あんたが束ね役あるいは国王ってやつになるってわけか。

ヘルマン：いや、君たちが選ぶ者はだれでも我が主人と認める。

ラーヴェンスベルク族長：みんながあんたを選ぶことは、十分承知だろうからな。(368頁)

さらに、勝利のあとで、ライン川沿いのローマ軍の要塞を占拠し、最後にはローマの暴君を成敗することを提案すると、ある族長は「あいつの命令に従ってさらに進軍すれば、馬鹿をみることになるだろう。あいつはもう頭をのけぞらせて、ローマを征服するために我々みんなを家来扱いできるとでも思っていやがる。」(376頁)と独白する。ほかの族長の多くも、ヘルマンの

計画が壮大に過ぎると言って反対し、残りの族長たちもこれに賛同する。結局ヘルマンは譲歩し、トゥスネルダが用意する祝宴にみなを招待する。

そもそもヘルマン文学では、全員が一人に従い誤った個人主義的自由を捨てられるかが問題の核心となるのであるから、グラッベのようにヘルマンがゲルマン人に合わせる形で終わるのでは、強い違和感が残るのは当然のことである。

クライスト版の最終場面は全く違ったものだった。族長の中でも強大な力を持つマルボドからゲルマンニアの王に推挙されたヘルマンは、最後までゲルマンニア統一に関心を示さぬウビイ族長アリスタンを裁き、高らかに宣言する。

だが諸君、トイトの勇敢な息子たちよ、/ さあ、静かな極の神苑に集まって、/ ヴォーダンに勝利という贈物を貰ったことを感謝しよう！—/ さしあたり、ローマ兵は一兵たりとも、/ このゲルマンニアの聖なる大地から逃さぬように、/ すぐさまライン川までわれわれは急がなくてはならぬ。/ そして、それから — ローマそのものに向かって敢然と進軍するのだ！/ われわれにしる、はたまたわれわれの子孫にしるだ、諸君！/ 私の見るところ、この広い世界も、あの人殺しの輩どものいる以上、/ あいつらを送り出していた根城を完全に破壊し、/ 荒れ果てた廃墟となったところには、一本の弔旗しか靡かせない状態にするまでは、/ そりゃ絶対安らぎはありえぬのだからね！<sup>(16)</sup>

グラッベにおけるライン川への出撃とローマへの進軍についての問いとその拒絶は、明らかにこのクライストの最終場面への応答だと捉えてよかろう。クライストの『ヘルマンの戦い』をグラッベが参考にしたことは、K. インマーマンにその本を返却する際に添えた礼状に記されている。「クライストのヘルマンをここにお返りする。ありがとう。そこから何が使えるかは、記憶に留めたよ。だが僕のアルミンは全然違うものになる。もっと良いものになるかどうかは、判断できないけどね。でも、そうなると結構自負しているんだ<sup>(17)</sup>。」

クライストにとっての急務は、ナポレオンへの憎悪を抱くドイツ国民の間にナショナリズムを呼び起こし、分立する領邦君主たちが合力して敵から祖国を解放させることだった。したがって、「ヘルマンの戦い」の史実に当時のドイツが取るべき姿が描き出されている。クライストにとって、その後のことは当座関心の外にあった。クライストが希求しつつも見ることのなかった「ドイツが取るべき姿」は、確かに1813年の諸国民戦争として実現する。



しかし、その後の歴史的展開の中でクライストが喚起しようとしたナショナリズムは効果のない空文句となり、政治的行動として機能しなくなる。

ウィーン会議の結果誕生したドイツ連邦は、34の主権を持った侯国と4つの自由都市から成る。統一されたドイツ国家ではなく、ドイツ諸侯がその主権を保証し合う君主同盟であったから、統一より結局、分裂の原理の勝利を意味した。ドイツ連邦成立とほぼ同時期に起こる、学生を中心としたリベラルな立場でのドイツ統一を求める抵抗運動は1819年までに鎮圧されている。1830年の七月革命を期に、1832年のハンバッハの大集会に見られるリベラルな反体制運動第二波が起こるが、これもまもなく政治的弾圧によって影を潜めることになる。

ドイツ統一を望むヘルマンに対して、族長たちは自分たちの権利と利益を優先してヘルマンを拒絶する。このクライストの最終場面を意識したグラッペの対照的な変更には、クライストが知るよしもなかったドイツ連邦に対する幻滅が明瞭に投影されている。

## (2) ヘルマンと民衆

ヘルマンの問いかけに否定的に反応するのは、しかし族長たちだけではない。ケルスキ人たちもまたローマには関心がない（「ローマが私らに何の関係があるのか。ローマの兵士たちや書記官たちを厄介払いしたところだ。そうなったからには家に帰って、家にいていいじゃないか。」(376頁)）。ヘルマンと族長たちの関係に、解放戦争後の政治状況を読み取るのは容易だが、ヘルマンと民衆の関係については少し丁寧に検討する必要がある。テキストの中に描写されている両者の関係を当時の社会的・歴史的視点から理解しない限り、単にグラッペの初期・中期作品に比して主人公と民衆の対立関係が消失している<sup>(18)</sup>とか、理想化されている<sup>(19)</sup>、あるいは逆にヘルマンと民衆の間には距離がある<sup>(20)</sup>、という言い方にあまり意味があるとは思えない。ここでは、ヘルマンと民衆の関係を三つの側面から考察してみたい。一つは身分制共同体と国民国家との関係から、次には当時の民衆理解という視点から、最後にグラッペの歴史観から考えてみる。

### a. 身分制共同体と国民国家

導入部においてケルスキ族の生活を描く際、グラッペは意図して身分制共同体の典型的特徴を付与している。身分制社会における支配の組織の中核が「家」であるように、ケルスキ族は一つの大家族のように暮らしている。第2場では、夫の留守中も妻のトゥスネルダは、労働する農民たちに食事をふる

まい、食を共にしている。しかし、その寛大さと優しさを示す反面、失態を演じた娘から即刻その職を取り上げる厳しさも見せている。ここには領主と農民関係に典型的にみられる人的な支配、隷属関係が経済的な生産関係と分かちがたく結びついていることが象徴的に描き込まれている。領主の農民に対する人的支配が典型的に現れるのは、家産的裁判権の行使である。したがって、先にも触れたが、続く第3場のローマの法務官による裁判の場は、侵略を受けたことによる重大な屈辱を表すことは言うまでもない。姿を現したヘルマンに向かって民衆が「領主様、いつあなたが裁いてくれるのですか。」(332頁)と懇願するように問うとき、彼らは「家」を守り保護する家父長本来の姿を期待している。その一方で、ローマ軍を離れ、今やゲルマン人を率いてローマ軍に戦いを挑むヘルマンは民衆に向かって宣言する。「民衆なくしてひとかどの者であろうと欲すれば、私はなんたる愚か者になるだろうか。」(346頁) ヘルマンと民衆の一体化、理想的関係の根拠としてよく引用される箇所である。主従の理想的関係が描出されていることは確かだが、あくまで一部族内のことであることに注意を払う必要がある。「第二夜」冒頭の夢の中で「あいつは選ばれた皇帝でしかないが、私は生まれながら族長だぞ。」(361頁)と漏らす台詞と合わせてみれば、ヘルマンが家父長としての部族長の自覚を持っていることは明白である。家父長制的家産制では、支配者は大衆を隷属化しながら、他方で大衆の離反を防ぐために良き君主であらねばならないが、そのあり方をグラッペは主従の理想的関係の根拠として頻繁に引用されるこの箇所に描き込んでいる。したがって、両者の理想的関係に比重を置いているというよりも、ゲルマン部族が家父長制的家産制を取る結束の固い身分制共同体であることを強調する方途なのである。ケルスキ族同様の族長と民衆の結束があるかどうかは別として、多数のゲルマン部族の各々が独立した身分制共同体なのである。だからこそ最終場面で明らかになるように、自己の権利を優先させる部族長たちに「統一ドイツ」は望むべくもない。ゲルマン部族あるいは部族長たちが、グラッペの時代の主権をもった侯国とその領主を代表していることは、先にも触れた通りである。

社会形態として、ゲルマン社会が代表する当時のドイツの身分制社会は、ローマ帝国に代表されるフランスという国民国家と対峙されている。ヘルマンは、このゲルマニアから侵略者であるローマ軍を撃退するが、それで満足するわけではない。そもそもローマの侵略を許したのは、統一した「国家」を持たず、部族間の競合があったからだった。したがって、ローマに対する勝利の末には、前近代的な身分制社会から近代的国家を建設することが課題だった。19世紀の前近代的ドイツが、近代的国民国家としてのフランスに征

服され、統一国家を希求するのと同じである。ヘルマンの発言を聞くと、族長たちの中から一人の首長が国民によって選出される民主的統一国家がイメージされる(367頁)。

しかし、この計画において、他の部族長はもちろんのことだが、ヘルマンは民衆からも協力を得られない。ここには、先の部族内での両者の関係とは別のレベルでの支配者と被支配者との問題が浮かび上がる。この問題は、前近代的身分制共同体としての社会形態に起因するものであり、これも実際に統一をめぐるドイツの事情と同様の問題と言えるのである。

#### b. 18・19世紀ドイツにおける民衆理解

ヘルマンが重要と考える「ドイツ」、「愛国心」、「自由」という言葉を民衆は知らないか、あるいはそうした概念を理解することに価値を見出していない。すでに触れたように、彼らはドイツという呼び名も、それがどこにあるかも知らない。ローマ人が愛国心のために戦うのに対して、彼らは穀物や家畜を奪ったローマ人への恨みから戦う。ヘルマンがローマ人から奪い返そうとする「自由」は、「第一夜」で賭サイコロをする二人のゲルマン人によって擲揄される。一方が立て続けに負け、乳牛、牧草地、家屋敷、妻と子を順に失っていく。最後には自分自身を賭けることになるが、その際「ああ神聖なる自由よ、我を見放し給うな」(359頁)と自由を嘲笑し、結局は奴隷となるエピソードが挿入されている。ヘルマンと民衆の政治意識には大きな隔りがある。「第二夜」はヘルマンの深い孤独の独白で閉じる。

人々は頭を垂れ、そして眠り込んでいる。(長い間)もう真夜中もずいぶん過ぎたというのに、まだ朝になろうとしないのか。明ければ血生臭いことになろう。だがその方が、何千という人々の中に居ながら、この恐ろしい静寂の中で恐らく私一人だけが彼ら全員を気遣い、彼らのために考えているということよりよほどました。(360頁)

勝利の後、民衆はローマの書記官や法務官たちの舌を引き抜くなど報復行為に及ぶ。暴力に夢中になる民衆をヘルマンは、無益な拷問や殺害をせず、奴隷として土地の開墾に使うよう諭さなければならない。自然とともに生きるゲルマン人は、それぞれの族長の下で身分制共同体に縛られ、国家を考えるには近視眼的で、自分の生活にのみ固執し、粗野である。

これは、グラッペの時代の民衆理解と考えていいだろう。国民の概念が未発達だった当時のドイツの領邦国家において、住民は専ら世襲臣属的な農民

であったから、政治向きのことを考えることは許されていなかったし、関心も持っていなかった。のちにドイツ統一の牽引役となるプロイセンでは、ナポレオンのドイツ制圧を切っ掛けに改革が始まるが、それは「上」からの改革であって、「下」からの支えを欠いたものであったことを想起する必要がある。

しかし、ヘルマンはその民衆たちの意向に譲歩する。民衆を祝宴に招くヘルマンの言葉が喜んで発せられたものでないことは、明らかである。このずれが、大勝利の後に大きな違和感を残す原因となっている。この最後をどう捉えたらいいのだろうか。一つは、先に比較したようにクライストの最終場面に対する対照的応答としての捉え方である。ナポレオンに対して敗戦続きであったからこそ、ドイツ統一に同意しない一族長アリスタンを処刑し、ゲルマン諸部族が一丸となってローマ帝国にさらに戦いを挑む未来が理想として高らかに宣言されている。しかしその一方でグラッベの時代は、ナポレオンから解放され、ドイツ統一が現実味を帯びたにもかかわらず、ウィーン体制が大きな失望となっていた。その意味で、グラッベの作品はこれまで見てきたように、当時の社会的・政治的状況を忠実にローマ軍を破るトイトブルクの戦いに映していると言える。それにもかかわらず、この作品が当時「ドイツ国民英雄叙事詩」と見なされたのには、フランス7月革命（1830年）によって目覚めた急進的作家グループ「青年ドイツ派」の活動があったからだろう。H. ハイネのいう「芸術時代の終焉」は、青年ドイツ派の作家たちに共通した時代認識であり、彼らの「行動の文学」に比して、明快な時代批判と行動につながる提言が見られないという理由で、グラッベの『ヘルマンの戦い』は古色蒼然とした伝統的ジャンルに振り分けられてしまったのだろう。

### c. 新しい歴史観

民衆に対するヘルマンの譲歩の中に主張されている、もう一つの重要な側面を見落としてはならない。それはグラッベの新しい歴史観である。「第三夜」はこうして大勝利の後に不安定さを漂わせたまま幕となるが、その後に短い「終章」が付加されている。場所は突然ローマに移る。歴史的戦闘後に終章が付くこと自体が、意外の思いを強くさせる。ヘルマン・モチーフが内包する、最後に達成される勝利の陶醉はこの終章によって相対化され、演劇的直接性が半減するからである。しかし、この意外な結びが、ヘルマンの譲歩を理解する鍵を与えているように思える。

瀕死のアウグストゥスが帝位後継者のティベリウスに貴族や富裕階層ではなく、民衆や下層民を助けとするよう忠告している。そこへ、ウォルスと三

個師団の全滅が伝えられる。それを聞いたアウグストゥスは、北方からのゲルマン部族の脅威だけでなく、東方からの脅威、すなわち民衆の中に広がってゆくキリスト教とイエス・キリストについて語り、新しい時代の到来を予告してこの世を去る。

アウグストゥスが予告する新しい時代とは大衆の時代である。ここには、明らかにグラッベの歴史観の変化が見て取れる。歴史は傑出した英雄によって作られたり、あるいは名付けようもない運命によって動かされるのではなく、大衆によって決定されるという歴史観に、グラッベは人生の最後の時に達したと推測できる<sup>(21)</sup>。ヘルマンが提案した国家的プログラムに反対したのは民衆であった。たしかに、ドイツの統一という観点では、民衆の意識はまだ熟してはいない。しかし民衆の結集があって初めて、大勝利は可能となった。グラッベの史劇に一貫するテーマは、歴史上の英雄の蹉跌と敗北だった。その最後の戯曲『ヘルマンの戦い』において民衆がドラマの中心に据えられたのである。こうした民衆・大衆の扱いはドイツ文学史上では初めてのことだったのである<sup>(22)</sup>。

近代的国民国家としてヨーロッパを席卷し敗退したナポレオンのフランスとその後の七月革命は、後進国であったドイツ、オーストリア、イタリアおよび東欧諸国を揺るがし変貌へと導く契機となった。ヨーロッパにとって新しい時代の幕開けだった。グラッベも、ナポレオンという政治的軍事的天才に惹かれる一方(『ナポレオンあるいは百日天下』が1831年に成立している)、戦闘を支え歴史を変えてゆく民衆・大衆のエネルギーを発見したのである。もちろん作品に描出されているように、当時のドイツでは歴史の担い手としての大衆はまだ十分には国民意識を共有してはいなかったことは言うまでもない。

ヘルマンと民衆との最後の場面はしたがって二重の意味で興味深い。一つはドイツが統一国家を目指すには民衆・大衆の自覚が前提でありながら、彼らの意識が未だに不十分である当時の状況が切り取られていること。もう一つは、近代という新しい時代の予感が、歴史上の英雄、すなわち史劇の伝統的主人公をして、歴史を作る新しい主人公としての民衆に譲歩させているという意味合いが重ねられていることである。この譲歩の中に読み取れるヘルマンの諦念を考えると、ここには20世紀の悲喜劇の要素がすでに萌芽しているように思えるのである。

### III 叙事的形式

新しい歴史観を表現するグラッベの『ヘルマンの戦い』は、伝統的戯曲形

式としての「閉じた形式」も破壊することになった。

導入部はまだ伝統的形式に則しているものの、その後には長さのまちまちな三日三晩の場に分割されて戦闘が展開する。悲劇では主人公の破滅にいたるまでの内的葛藤に重点が置かれるため、具体性は忌避されるのが普通である。そのため戦闘は、筋や場所の一致という形式上の束縛もあり、使者の報告やタイヒョスコピーの手段が用いられる。ところがグラッベの場合、戦闘が直接舞台で演じられる。

ヘルマンとウォルスの軍事的指示が交互に出される戦闘の開始から、まとまりをもった両陣営の小場面を繰り出すパースペクティブの交替が頻繁に行われる。軍事作戦の豪華な描写によって戦闘を可能な限り直接的に捉えようとする意図が、大規模な同時進行を行わせている。このように計算された戦闘場面は、映画のスクリーンに展開する大パノラマのような画面を想起させる。まさにこの点が冒頭でも述べたように、この作品の舞台化を極端に遅らせた一因でもあった。こうした戦闘場面は、『ヘルマンの戦い』ほどではないにしろ、すでに『ハンニバル』や『ナポレオンあるいは百日天下』においても作品の見所として独特の位置を占めている。

そこには言うまでもなく、大衆の動員を前提とする近代的戦争が歴史を動かすのだという歴史観がある。グラッベの場合、それを叙事的に描こうとすることで、伝統的演劇形式としての閉じた形式の崩壊が起こっている<sup>(23)</sup>。戦闘という重大事をより広い歴史的連関の中に据えることで、登場人物が二次的な役割に甘んじることになったからであった。

「ドイツ史劇におけるヘルマン・モチーフの受容」三部作は本論で一応完結する。16世紀にフッテンがヘルマン・モチーフを初めて取り上げた対話劇『アルミニウス』を振り出しに、ドイツ国民史劇の基礎を築いたJ. E. シュレーゲルに至るまで、どのようにこのモチーフが文学作品に取り上げられてきたか概観した。その後、ジャンルをドイツ史劇に限定して、ヘルマン・モチーフの受容をヘルマン文学における最重要作品（J. E. シュレーゲル、F. G. クロップシュトック<sup>(24)</sup>、H. v. クライスト<sup>(25)</sup>、そしてCh. D. グラッベ）を考察しながら跡づけてきた。この四人の作品は史劇の時代と見なされている1760年から1860年にほぼ分散されており、一世紀にわたる史劇の成立、発展、盛期そして衰退を同時に確認することとなった。

近代という新たな時代状況からグラッベが恐らく人生の最終段階で持つに至った歴史観は、伝統的なヘルマン・モチーフによる史劇とは異なる結末を生み出すことになった。歴史上の英雄が民衆・大衆に譲歩することで、歴史

の担い手の交替が予示されるという全く新しい視点が加えられた。このことは、しかしこれまで「ヘルマンの戦い」が精神的レベルであれ、現実的レベルであれ、常にナショナリズムと結びつき、強力なリーダーの下で強敵を打ち破りドイツの統一を果たすという理想を提示するという役割を果たせなくなったことを表している。理想主義が死滅あるいは色あせる時代にあつて、史劇の神話的人物は当時の覚醒した人々にとってその力を失いつつあったことは容易に想像できる。この歴史観に基づく戯曲はまた当然のことながら、従来の史劇の形式にも収まりきらなくなっていた。グラッベは閉じた形式を破り、叙事的な開いた形式へと大胆に進んでいった。こうしてグラッベの『ヘルマンの戦い』は、20世紀の演劇に連なるさまざまな要素を包含しつつ、史劇の時代の終焉を秘かに宣告する代表的作品の一つとなっているのである。

#### 註

- (1) 作者の死後デュッセルドルフのシュライナー出版から刊行された。完成原稿の送付予告と読後のコメントを求める、生涯の友人であるM. L. ベトリに宛てた手紙の日付は1836年7月21日となっている。同じくベトリに宛てた1835年8月26日付の手紙には、原稿の完成が伝えられている。以後数回にわたって改稿が重ねられる。Siehe Löb, Ladislaus (Hrsg.): *Grabbe über seine Werke*. Frankfurt am Main 1991, S.217 u. 208f.
- (2) Sengle, Friedrich: *Das historische Drama in Deutschland*. Stuttgart 1974, S.3.
- (3) Siehe Pormann, Maria: *Grabbe – Dichter für das Vaterland. Die Geschichtsdramen auf deutschen Bühnen im 19. und 20. Jahrhundert*. (Inauguraldissertation) Verlag F. L. Wagners 1982, S. 244.
- (4) 上演記録については、Pormann (3), S.246-278参照。
- (5) D. コップは1970-1985年のグラッベ研究をまとめている。Kopp, Detlev: *Die Grabbe-Forschung 1970-1985*. In: Freund, Winfried (Hrsg.): *Grabbes Gegenwartwürfe. Neue Deutungen seiner Dramen*. München (Wilhelm Fink Verlag) 1986.
- (6) Sengle (2), S.170-171.
- (7) 妻のルイーゼに宛てた1835年1月8日付の手紙のほか、同月に書かれた二通の手紙参照。1月8日の手紙には、リッペ地方の文書館員で義父にあたるCh. G. クロースターマイアー著『ヘルマンがワルスを打ち負かした場所』(1822年)を郷土史の参考資料とする予定であることが記されている。Siehe Löb (1), S.200f.
- (8) Kopp, Detlev: *Geschichte und Gesellschaft in den Dramen Christian Dietrich Grabbes*. Frankfurt am Main/ Bern 1982, S.225.
- (9) Sydow, Wolfgang: *Deutung und Darstellung des Arminiuschicksals in seinen wesentlichen Ausprägungen besonders seit Kleist*. (Inauguraldissertation an der Uni Greifswald) S.92ff.
- (10) Brüggemann, Diethelm: *Kampf um die Wirklichkeit. Grabbes*

- "Hermannsschlacht" im Spannungsfeld seiner letzten Lebensmonate. In: Freund (5), S.110; Plachta, Bodo: Ch. D. Grabbes "Hermannsschlacht". Geschichte und Nationalismus. In: Rölleke, Heinz (Hrsg.): *Wirkendes Wort. Dt. Sprache und Literatur in Forschung und Lehre*, 39. Jahrgang 1989, S.215f.
- (11) Schneider, Manfred: *Destruktion und utopische Gemeinschaft. Zur Thematik und Dramaturgie des Heroischen im Werk Ch. D. Grabbes*. Frankfurt (a.M.) 1973, S.384ff.
- (12) Oellers, Norbert: Die Niederlagen der Einzelnen durch die Vielen. Über Grabbes "Hannibal" und "Die Hermannsschlacht". In: Broer, Werner und Kopp, Detlev (Hrsg.): *Christian Dietrich Grabbe (1801-1836). Ein Symposium*. Tübingen 1987, S.126ff.
- (13) クライストの『ヘルマンの戦い』については拙論「ドイツ史劇におけるヘルマン・モチーフの受容(2) -ハインリヒ・フォン・クライスト『ヘルマンの戦い』(1808年)の考察を中心に-」『敬和学園大学研究紀要』第7号、1998年参照。
- (14) Grabbe, Christian Dietrich: *Werke und Briefe. Historisch-kritische Gesamtausgabe in sechs Bänden*. Hrsg. v. der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Bearbeitet v. Alfred Bergmann. Emsdetten (Westf.) 1961, Werke III, S.336. 以下、引用頁を本文に記載。
- (15) 自然に生命感を与える表現上の工夫として、動きを表す動詞や現在分詞の多用、擬人化、あるいは自然と人間の性格に共通する動詞や形容詞を効果的に配置している点についてブリュッゲマンが詳細な分析をしている。Brüggemann (10), S.103ff.
- (16) Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. v. Helmut Sembdner. München (DTV) 1994. Bd.1, S. 628. 佐藤恵三訳『クライスト全集』第三巻、沖積舎 1995年、403-4頁。
- (17) Löb (1), S. 202.
- (18) Schneider (11), S. 361.
- (19) Ehrlich, Lothar: Die Hermannsschlacht. Werk und germanistische Interpretation im faschistischen Deutschland. In: Broer, Werner und Kopp, Detlev (Hrsg.): *Grabbe im Dritten Reich*. Bielefeld 1986, S.78.
- (20) Siehe Kopp (8), S. 205f. コップは、彼以前の研究が専らヘルマンをゲルマン人にとっての理想的なリーダーとする解釈に対して、最終場面における両者の乖離を強調している。Siehe auch Oellers (12), S. 119 und Plachta (10), S. 216. エラーズとプラハタは、矛盾を孕むヘルマンと民衆の関係よりは、最終場面での族長の提案を拒否する民衆に焦点を当てて、グラッベの歴史理解について述べている。この点については本論でも取り上げる。
- (21) 作品研究の中では Oellers (12) および Plachta (10)がグラッベの歴史観について簡単に言及している。
- (22) Siehe Sengle (2), S. 172.
- (23) V. クロッツは開いた形式の戯曲例としてグラッベ、ビューヒナー、ヴェーデキント、プレヒトの作品を挙げている。フォルカー・クロッツ (戸室博・高橋行徳訳) 『閉じた戯曲 開いた戯曲』早稲田大学出版部 1990年、3頁。



- (24) 拙論「ドイツ史劇におけるヘルマン・モチーフの受容(1) -J. E. シュレーゲル『ヘルマン』(1740/41)、F. G. クロップシュトック『ヘルマンの戦い』(1769)の考察を中心に-」『敬和学園大学研究紀要』第4号、1995年参照。
- (25) 註(13)。